愛隣館研修センターニュース 第82号

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151 2F *TEL* 075-621-3849　*FAX* 075-621-1579
E-mail :airinday@sunny.ocn.ne.jp　*http*://www.airinkan.net　振替 01020-5-39321
編集発行所：社会福祉法人イエス団　愛隣館研修センター　発行責任者：平田　義

大学の力を、ニュータウンの活性化に活かしたい
～京都文教大学杉本教授に聞く～

宇治市槙島にあります京都文教大学では、様々な取り組みを通して大学と地域の連携を推し進めてこられています。向島が大学と隣接する地域であること、また、向島駅が学生たちの最寄りの乗降駅になっていることなどから、これまで「向島春の祭典（昨年から秋の祭典）」への参加協力や「向島ほっこりフェスタ」を主催するなど、地域の活性化の働きに貢献されております。このたびは、その仕掛け人のお一人であります、文化人類学科教授の杉本星子先生にお話を伺いました。

―まずは先生のプロフィールをお願いします

杉本：私は、京都文教大学に文化人類学科ができました12年前に赴任してきました。専門は文化人類学で、南インド地域の研究を行っています。特にインド女性の民族衣装であるシルクサリーが製品になる過程で、どのような宗教やカーストの人々が仕事を分業しできあがっていくのかなどを南インドの村々を回って研究しております。また、2004年のスマトラ沖地震で津波被害に遭われた南インドの村の経済復興についても調査をしてきました。

―なぜ、向島地域との連携を考えるようになったのですか

杉本：大学の「人間学研究所」の共同研究のテーマとしてニュータウンを取り上げたのが始まりです。そこで、戦後の日本の新しい社会づくりの象徴として全国に建設された「ニュータウン」の研究を行ってきました。その過程で、全国各地のニュータウンにおいても、老朽化が進み、住民の高齢化や孤立化、また多文化共生にまつわる課題などが起きていることがみえてきました。これは向島ニュータウンにもあてはまる課題でもあります。この課題を突き詰めていくことで、日本社会の将来がみえてきます。言い換えれば、このニュータウンの課題解決に向けて地域の人びとがアクションを起こしていくことで、これからの共生社会を創りあげていく可能性が開けるかもしれないのです。それで大学と向島ニュータウンの住民との連携を考えるようになりました。

―向島ニュータウンとの具体的な関わりはどのようにつくられていったのですか

杉本：まず、徒歩で通学している学生たちから、通学路にあたる場所をきれいにしたいという声があがり、自主的に清掃活動を行うようになりました。そしてその活動に地域住民の方々も一緒に手伝ってもらえるようになったのです。そこで、学生たちと地域の方々との連携が生まれました。

その頃、向島駅前に葬儀場建設の話が持ちあがったことから、向島住民が中心になって、“まち”の大きな“顔”である“駅前区域”を住民の利便性に適した区域にするよう「向島駅前まちづくり憲章」を定め、「向島駅前まちづくり協議会」が結成されていきました。その「協議会」の活動に京都文教大学の学生有志が参画するようになっていったのです。

その後、「協議会」の取り組みの一環として「向島駅前春の祭典」が催され、そこに学生たちも様々な形で参加するようになりました。

学生たちは「祭り」を通して地域を元気にしたいと考えています。先月の19日にも学生たちが中心になって「向島ほっこりフェスタ」を開催し、地域の人たちとの交流を深めていくために、いろいろなイベントを企画しました。

―素晴らしい働きですよね。まさに、地域の活性化の一翼を担っていただけているといっても過言ではないですね。では、最後にこれからのヴィジョンについてお話し願えますか

杉本：京都文教大学では学生たちが現場に出向いて学んでいく実践教育を大切にしております。学生は学びの成果を発表し見ていただくことで成長し、そこで自尊心も育っていきます。地域の方々との交流が学生たちにとって大きな学びの場となっていると確信しています。

また、教員たちも、それぞれのネットワークを築いて、向島地域の活性化につながる様々な取り組みを展開していきたいと考えております。

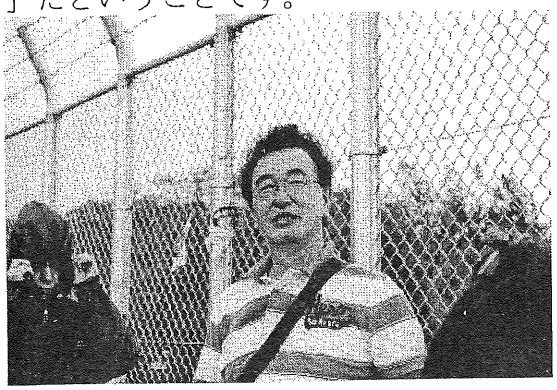
―本日はお忙しい中ありがとうございました。これからも共にがんばっていきましょう！

□■■□□■□■■□□■□■■□□■□■■□□■□■■□□■□■■□□■□■■□□

「ずっとウソだった」

イエス団京都ブロック沖縄平和研修に 6 月 22 日から 26 日まで、総勢 10 名で行って参りました。今年もたくさんの出会いと学びがありました。その中で、印象に残ったひとつの言葉があります。それは「ウソ」という言葉です。辺野古と高江をガイドしてくださった日本基督教団佐敷教会牧師の金井創牧師が、説明の中で何度も日本政府や米軍の「ウソ」を暴いてくださいました。

一例をあげれば、6 月 21 日に日米両政府は安全保障協議委員会（２プラス２）を開き、普天間の代替施設を滑走路２本の V 字形に決定したとの共同声明を発表しました。滑走路を V 字にする理由は、戦闘機が集落の上空を飛行することがないように、離陸は海上に向かって飛びだし、着陸は海上から飛んでくるという説明で、地元の了解を得たいとのことでした。しかし、米軍がよく行うヘリコプターの訓練はタッチ＆ゴーという訓練で、着陸したらすぐにまた離陸していくというものだそうです。ということは、着陸した滑走路から離陸していくことは明々白々であり、日本政府の説明は「ウソ」だということです。



台風の強風の中、辺野古の浜に新しく敷設されたフェンスの前で説明してくださる金井創氏

そもそも 1995 年に「米兵による小学生女子集団強姦事件」が起こり、沖縄が本気で基地撤去の意思表示を行ったことにより、1996 年、日米両政府は沖縄に関する日米特別行動委員会（ＳＡＣＯ）で、「今後５乃至７年以内に十分な代替施設が完成し、運用可能になった後、普天間飛行場を返還する」と突然の記者会見で発表しました。がしかし、その後 15 年を経過した今も普天間基地は存在しています。この約束も「ウソ」だったんです。

また、1997 年 12 月 21 日、辺野古の海上基地建設をめぐって名護市で市民投票が行われ、基地建設反対派が勝利しました。しかし、その 3 日後、当時の名護市長比嘉氏は東京に出向き、基地受け入れを表明するとともに市長の辞任を発表しました。これも信じがたい「ウソ」だったんですね。

極めつけは、一昨年に政権交代で誕生した鳩山総理が、普天間の代替施設は「国外、少なくとも県外」と国民と約束しましたが、これもまた「ウソ」だったんです。この「ウソ」については、ウィキリークスの暴露によって、日本の官僚たちが裏でアメリカとつるんで「ウソ」にさせていったともいえるでしょう。

また、6月24日の琉球新報に東日本大震災に伴う米軍の災害支援「トモダチ作戦」は、放射能に汚染された戦場を想定した訓練だったと米紙ウォールストリート・ジャーナルが伝えたと掲載されました。その上、放射能で汚染された航空機の除染に使用した水は沖縄に垂れ流しだそうだ。これこそ許しがたい「ウソ」ではないでしょうか。

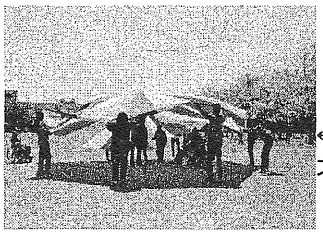
これらのことは、沖縄に対する「ウソ」の中のごく一部です。私たちは、その「ウソ」を見抜いていく「目」を養っていき、決して騙されずに、基地のない平和な沖縄に戻るまでしなやかに闘い続けていきたいものです。

斉藤和義さん！
原発だけでなく沖縄バージョンの「ずっとウソだった」歌ってくれ～(平田)

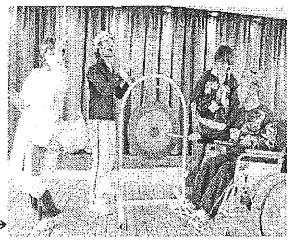
2011年4.5.6月の活動

4/2　ゆうりんでイチゴ狩り→

4/2-8　お花見！



←アクアパルコ洛西で
大はしゃぎ～!!



4/9　医療的ケア学習会
5/10 京都ブロック会議
5/23・6/1
　初夏のお出かけ　in
　MICHIGAN（ミシガン）
出航の合図　ドラたたき～！→

6/11　京都ブロック沖縄研修事前学習会
6/06　医療的ケア学習会「ポジショニング」
6/14　京都ブロック会議
6/16-17　法人ブラッシュアップ研修
6/17　同志社女子高校花の日訪問
　　素敵なお花と出会いをありがとう！
6/19　向島ほっこりフェスタ
　　フリーマーケットエリアにて福島・岩手障がい者施設製品販売をしました
6/19　SIEA 理事運営委員会、事務局会議
　　今年は済州島セミナー＆タイセミナーを予定。興味のある方は是非連絡を！
TEL：075-621-3849　mail：siea@abelia.ocn.ne.jp
6/20　医療的ケア学習会「からだのゆるめ」
6/22-26　京都ブロック沖縄研修
6/29　医療的ケア学習会「摂食」

静江さん　ありがとうございました

2011年5月10日、林川静江さんが天国へ旅立たれました。97歳の誕生日を迎える直前でした。

『忠男のことをどうかくれぐれもよろしくお願いします！』

息子の忠男さんは1938年生まれ、小児脳性まひの障がいがありました。就学猶予の時代でしたが、静江さんは小学校へ忠男さんを木製の台車（車いすはまだなかった）に乗せ毎日付き添われたそうです。また次男の自営業も手伝い、親族の話によると、ずっと動き回っていた印象しかなかったそうです。

９０歳代になり耳が遠くなられ、補聴器をつけても聞きとりにくくなっても、不思議と忠男さんの声は離れていても聞こえていました。また、２年前のバーベキューでは沖縄の唄を歌詞を見ながら嬉しそうに熱唱された姿が忘れられません。

高齢になるにつれ、忠男さんの介護が思うようにできなくなられました。それでもおふたり一緒の生活が何より大切だと支援者間で共有し、おふたりの生活をサポートさせてもらいました。障がいのある子をもつ親の想い、親亡き後のこと、高齢になり介護ができないジレンマ…96年間の人生の重みを感じました。そして、障がいのある忠男さんをこよなく愛していたことを忘れません。愛隣館を信頼してくれた静江さん、忠男さんは任せてくださいね！（佐藤）

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

詩人　柏木正行さん（1945-2006）の魂に触れる ⑮

「一日」

一日が終った
西暦一九八八年
一月二五日
三百六十五日の中の
一日
それが終った

どんなに人間が賢くなっても
如何に科学技術が進歩しても
時間は止められない
後にも引き戻せない
昨日から今日へ
そして明日へ
過去から今へ
そして未来へ
こうした流れの中の一日でしかない

しかし
すべてが今日限りではない
昨日の次に今日があるのだ
だから明日があるのだ

もし
自分の命が今日だけだと知ったら
私は絶望するだろう
そして理性を投げ捨て
したい放題をするだろう
何故なら
今日だけしか生きられないのだから
明日は無いのだから

しかし
昨日があって
今日があるように
必ず明日があるのだ
そう信じているのだ
だから生きていられるのだ

東日本大震災関西障害者応援連絡会に参加して

田中　仰

第10陣で福祉避難所ひたかみ園近くの津波状況は見ていました。第10陣のときに閉鎖していた教習場が営業していることや、津波によって運ばれてきた船・車が・道沿いの瓦礫がなくなっていることに驚きました。本当に、徐々に復興していることを実感させられました。

ある朝、大雨で外での作業は難しいと判断。職員さんの提案で女川地区の現状を見てもらいたいと連れて行って下さる機会がありました。女川は第10陣で見た石巻の状態と変らず、車や船、ありえない場所にあるバス。津波によって倒れているビル。この地区の復興はまだまだ時間がかかると感じました。又、高台にある女川町立病院では、津波の大きさを肌で感じることのできた場所でした。言葉で表すと単に40メートルの津波。でも、その規模の大きさは自分の想像を超えるもので、テレビでも見た光景ではありましたが、とてもリアルな景色だったので恐ろしく、ショックでした。

福祉避難所の状況は、27日に引っ越し予定であったのが30日となり、利用者・家族の不安は大きくなるばかりでした。ある家族のお母さんは、「引っ越しが延びると不安で。とにかく見通しがもてない。これからの生活が不安。仮設を見に行くとまだ工事をしている。」など、いつも笑っておられる表情が崩れ、険しい表情で僕に訴えて来られることがありました。僕にできることは、聞くしかない。

とても無力でした。

3回、被災地に足を運び、利用者・家族・職員と僕の名前を覚えてくれ、「来てくれると思っていた」と言われたときは嬉しかったです。その分、深く関わっているだけに、どこで引くのか？どこまで関わるのか？が、ポイントになった期間だったと思いました。

又、今回の支援は特殊班。トラックやユンボの運転・靴箱制作など、今までの仕事とは違う分野での仕事がメインでした。職員さんの話だと、震災日から特殊班は職員の家の瓦礫の撤去などや炊き出をやっていたという話しを聞きました。介護職員が足らないからそのような人材をボランティアとして派遣をするだけでなく、どんな状況でも動ける人材が必要だったのだと感じました。介護職＋αの能力が被災地ではとても重要になってくるのだと感じました。

2011年　夏期献金のお願い　――これからの"地域"を見据えて――

当センターが、この向島の地に誕生してから、早くも 32 年が経過いたしました。今日まで、皆様方のご理解とご支援によって支えられ、活動を続けることが出来ましたこと、心より感謝します。

2012 年 4 月からの、「自立支援法」「児童福祉法」の「改正案」が示されました。来年度からは新しい枠組みのもとで動き出すことになります。

しかし、どのような法律や制度ができたとしても、隙間はできてしまいます。私たちは、その隙間を埋めていく働きを、これからも続けていきたいと願っております。その働きのために、皆さまからのご支援、ご協力をお願いいたします。

これまでも皆様方には多額の献金をして頂いているにもかかわらず、新たなお願いをさせて頂くのは、誠に恐縮ですが、今年度も夏期献金にご協力頂きますよう、改めてお願いを申し上げる次第でございます。

《夏期献金・要項》

目　　的：障がい児・者とその家族とが地域で安心して暮らしていくことができる為に、愛隣館研修センターの今後の活動を支援する

目標金額：　3,000,000円　　※　口数、金額ともに任意です。

送金方法：　郵便振替　01020－5－39321

口 座 名：　社会福祉法人イエス団　愛隣館研修センター

★お知らせ★

▽愛隣館研修センターは、八月十一日～十七日まで夏期休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▼愛隣館研修センターニュース82号完成▽ご意見ご感想お待ちしております（さ）

▼震災における原発の被害が広がっている▽日本中が目に見えない放射能に怯えている▽今になって原発をめぐる論議が活発だ▽私たちは「広島・長崎」で被曝の恐ろしさは体験済みである▽チエルノブイリやスリーマイル島の事故で原発の恐怖も知っているはずだ▽にも拘らず、日本では国策として原発を推進してきたのだ▽批判するのは簡単なことだが、私たちも原発から送られてくる電力により今の生活を享受している▽原発により避難を余儀なくされている人に思いを寄せ、今こそ行動に移す時がきたのだ（ひ）